最優秀（高校生の部）

生きた証

大阪府　相愛高等学校　三年
木津（きづ）　喜乃（よしの）

私は先日、大阪・関西万博を訪れた。そこで目にしたのは、写真から３Ｄモデル技術によって復元された被爆者の懐中時計で、今も深く心に残っている。時計の針は原子爆弾が炸裂したまさにその瞬間を指したまま静止していた。文字盤には焦げ跡やヒビ、普段から使い込んでいたことが見てとれる細かな擦れ跡までがしっかりと刻みこまれていたのだ。これはあくまで再現モデルで、実物を見たわけではない。それでも私の心に深く残っているのは、持ち主が懐中時計と共に人生を歩んできたということが、容易に想像できたからだ。「一つの人生」が確かに目の前に存在していたのだ。

この展示に、生きた証が残るということの重大さに気づかされた。被爆者や戦死者のなかには、手がかりも記憶も奪われてしまった人が大勢いる。その遺族の心情は想像を絶するものだろう。だからこそ、遺された人が過去と向き合う手助けをするために、このような技術が開発されたのではないかと感じた。

しかしそれは、簡単に感心するだけで済ませてはならない。

戦争は無差別に命を奪っていく。年齢も性別も過去も未来も関係なく、その全てを奪っていく残酷なものだ。誰もが望んでいないはず。それなのに、未だ過去の話ではなく今も世界で繰り返されている。

そんな今を生きているからこそ、私たちは命の大切さを忘れてはならない。一番身近であり、だからこそ常に意識することは難しい自分自身の「命」の存在。それを今一度見つめ直し、未来へ繋いでいく必要があるのだ。

戦争の遺物が語るのは悲しみだけではない。そこには生きた証があり、「命」が刻まれている。そしてその「命」は決して絶やしてはならない。ひたむきに平和を守ろうと生き、幾千の「命」と共に歩んでいくことこそが、今を生きる私たちの使命である。「命」が当初の肉体を失ってから何年の月日が経っても、私自身のなかで彼らの「命」を生き続けさせたい。